

フラウトリの海が見える

日野多香子 作

伊藤悌夫 画



小学館の創作児童文学シリーズ9

プラウトリの海が見える

日野 多香子 作

小学館 1979

144P 215mm NDC 913

プラウトリの海が見える

一九七九年八月十日

定価・七八〇円

初版第一刷発行

著者・日野多香子

画家・伊藤悦夫

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社 小学館（〒一〇一）

東京都千代田区一ツ橋一フ三十一

電話・東京〇三（三三三）五五四〇（編集）

五三三三（製作）五七三九（販売）

振替・東京八一〇〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

＊製本にはしゅつぶん注意しておりますが、万一、落

注、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえ

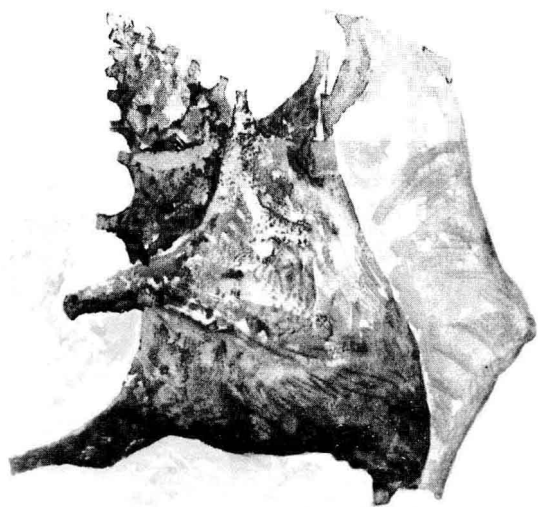
良品が、

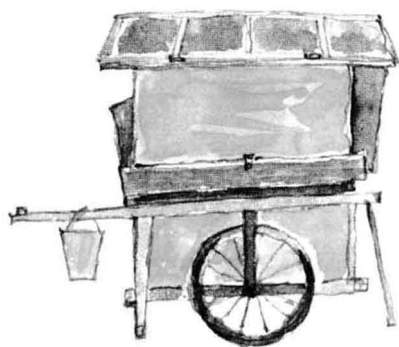
部までの内容の一部または全部を無断で複写複製（コ
ピー）することは、法律で禁められた場合を許さず、著
出版社より出版社の権利の侵害となりますので、その
社あて許め小社あて許諾を求めてください。

プラウプトリの海が見える

日野多香子 作

伊藤悌夫 画





装幀デザイン
中野博之

1	美沙ラーメン本日開店	6
2	とうさんラーメン日本一	19
3	おやじ公害	23
4	巻貝の思い出	30
5	なぞの手紙	43
6	正輝と美沙	57
7	シヨバ代騒動	67
8	ジョン・ベちゃんの家	77
9	由美の来た道	94
10	暗い冬の夜	105
11	ラーメン・パーティー	121
12	それぞれの旅立ち	129
13	巻貝のひびきのなかで	137
	あとがき	142

日野多香子（ひの たかこ）

一九三七年、東京都に生まれる。東京学芸大学国語科卒。在学中から児童文学の創作を志し、卒業後も、教壇にたつかたわら、日本童話会、「だ・かほ」の会に所属して作品を発表。その体験から、学園生活を題材にしたものが多い。六九年、「風の花ぞの」で講談社第十回児童文学新人賞を受賞。主な作品に、「ここに空がある」「闇と光の中」など。

住所／東京都東久留米市中央町四一―一二

伊藤悌夫（いとう やすお）

一九二四年一月一日、京城に生まれる。千葉工大入学後、感ずるところあって中退、絵の道にはいる。現在、油彩活動をつづけるかわら、イラストレーターとして活躍。抒情的なタッチの絵を得意とし、とくにメルヘン、SLの分野の作品が多い。二科会会員。

住所／東京都世田谷区上北沢三―二四―一一

フ
ラ
ウ
プ
ト
リ
の
海
が
見
え
る





1 美沙ラーメン 本日開店

「おやっ！」

屋台のこちらがわで、美沙は目をみはった。

いま、荻窪駅の構内からとびだしてきたのは、たしかに、同級生の清野正輝。塾かなにかの帰りだろうか。ふくらんだズクの白カパンのほかに、大きな地図帳を持っている。

ハイヤー待ちの歩道のところで一しゅん止まり、ちらとこっちを見た。そのまますすぐに、こちらへむかってくる。

屋台中華そば屋『希望軒』の前で、美沙は首をちぢめた。

（やばい。見つかったな）

だが、正輝は、屋台のむこうがわに足を止めると、

「ラーメン一つ」

かあさんのほうだけ見て注文した。それから考えぶかげに『希望軒』の赤いちょうちんを見あげていたが、その目をおとしたとき、はじめて、「おやっ!」という表情になった。

「こんばんは」

すかさず、美沙がいう。

「こんばんは」

正輝はぼつのわるそうな顔をうつむけた。

「山路さんちだったのかあ」

小さな声でいった。

「お友だち?」

かあさんはニコニコ顔になって、

「美沙、この坊やはね、うちのお得意さんのひとり。週に二回、塾通いで四谷まで行ってるの。でしたね?」

(かあさんたら、なにもあんな大きな声で……)

美沙ははずかしい。

「あんだ、こしらえておあげ。チャーシューたつぷり入れて」

美沙はますますはずかしい。それでも、はりきって注文のラーメンをつくりはじめた。

（輝くんに出すんだもの、おいしくつくらなければ。希望軒のラーメン、とうちゃんじまんの味つけが、今夜だけ、がた落ちだったなんてことのないようにしなければ）

ようやく来てきた手つきで、だしのもともたつぷり入れてつくりあげる。

「はあい、どうぞ」

こちらがわからさしだしたとたん、ニッと正輝はうれしそうに笑った。一口すすって、

「うまいっ！」

というと、もうほかのことは忘れたようにいきおいよく食べはじめた。

さっきまでのお客たちがとだえて、いま、屋台には正輝ひとりだけのこっている。その正輝を、すぐうしろのビルからおりてくる螢光燈のあかりが、青白くつつんでいる。

なにかがへんだ、と美沙は思う。同じ六年一組のクラスメートのなかで、もっとも尊敬していた正輝が、この店の常連だったなんて、よろこんでいいのか、はずかしがっていいのか、ともかくみょうな気持ちなのだ。

（かわいそうに、よほどおなかがすいてるんだわ。でも、こんなにおそくまで、電車にのっ

て塾通いなんて、すごい。いつも教室きょうしつの授業じゅぎょうのときには、どんなむずかしいひねった問題もんだいも、さのさいさいと解といてしまふ輝くんが、夜はべつの学校へ行っていたなんて

「ごちそうさま」

スープを少しだけのこしてはしをおくと、

「はい、おばさん、お代だい」

銅貨どうがをきちんと台の上にならべ、

「おやすみ」

美沙に笑いかけた。

「おやすみなさい」

あわてていいかえしながら、

（満足まんぞくそうな顔！）

美沙は思った。うれしかった。

商店街のむこうへと遠とざかっていくうしろ



姿を見送りながら、思わず、ふうっとためいきをついた。

はじめてのとうさんの代理。はじめての、かあさんの片腕。九時からずっと働きとおしてきた疲れが、いっぺんに吹きでてきた感じた。

「同級生だったのかい？」

かあさんは、ちよっぴり美沙の気持ちがわかったという顔で、何回もうなずいた。

「そ。学級委員さんなんだ」

「そうかい。毎晩ああやって、ごくろうなこったね」

「どっかの中学受けるんだって」

「へーえ」

大げさに肩をゆすって、かあさんは、屋台わきに出してある木のいすをあごでさした。

「すわんな」

「いい。まだ、腕が鳴ってるんだ」

強がりをいって、美沙は、だいぶたまったどんぶりを洗うため、すじむかいの、もうしまっているたばこ屋さんの水道へと走った。

バケツのなかに、七個ほど重ねたどんぶり。かあさんが屋台の流しで洗剤をくぐらせただ

けのどんぶりをゆっくり洗いながら、

(とうさんとあさんは、毎晩なんだな)

その苦勞くろうの重みおもが、ずしんとからだのおくへしみこんでくる。

弟おとうとの修おさむと、何回かおともしてきたことはあったが、いままで商売しょうばいに手を出したことはない。

だから、しゅんしゅん煮にたっているあつい湯から、ざるにおそばをすくいとるとうさんの姿すがたも、わきでチャーシューやシナチクをならべていくかあさんの手つきも、たのしいままごと遊びあそびとしてしか、美沙には思えなかった。

だが、いまはちがう。九時から十時半まで、たつぷりと働かせてもらいうち、美沙には、からだをつかうことのたいへんさがわかりはじめていた。

とうさんが、とつぜん、具合ぐあいがわるいといって、夕ゆふがた寝ねこんでしまったとき、

「わたし、かわりに行く」

いきこんで申し出もした美沙だったけれど、やっぱり来てよかったと、しみじみ思う。

とうさんが、郷里きょうりの新潟にいがた市でタクシうの運転うんてん手しゅをしていたのは、美沙が小学三年の夏休なつやすみまでのこと。そのあと、一旗ひとあげるのだといって東京へ出てきてからは、ずっと、渋谷しがやの大

きな中華料理店へ働きに出ていた。いつか、のれんを分けてもらい、中華そば屋の主人になるというのが、そのころのとうさんのねが이었다。

だが、三十人近くも従業員がいて、おまけに毎日のようにメンバーが入れかわる。しかも、いつまでたっても料理場の下づくりばかりさせられるうち、とうさんも考えるようになってしまったらしい。

たとえ、小さな屋台店からでもいい、おれは、一日も早く、おれの店をはじめなければいけないと。

こうして、美沙一家は、この五月に、ここ杉並のはずれの町に越してきた。

とうさんの新しい屋台『希望軒』は、その名のとおり、あしたのためにのびていくぞというかまえを見せた、りっぱなものだった。渋谷のお店から、かなりの借金をして、台の上にはステンレスをはりめぐらした。下にはガスコンロ、かまのわきには流し台と小さな戸だなまでついている。そのりっぱさかげんときたら、この広い東京にだって何軒とはないだろう。

その屋台で、毎夜、九時から明けがたの五時までを、とうさんたちはねばりつづける。その心意気が、はじめて今夜、美沙にもわかりかけてきたようだ。ながしの運転手さん、予備校生、おそくまで残業して帰っていく、駅のむこうのガラス工場の工員さんたちが、ひっき

りなしにやってきては、おそばをあわただしくかきこむと、満足げに立ち去っていったからだ。

ニャオ、キャン、ニャオ、キャン、キャンアオン。

甘えたような犬の聲がしたので、美沙は洗ったどんぶり入りのバケツをさげて、屋台にもどった。

数人の客たちがかこんでいる屋台から数歩はなれたところに、老人が小犬とむきあつて、しゃがみこんでいる。銀髪をきれいに分けた、品のいい小がらな老人だ。犬は柴犬で、耳をかわいくぴこつと立てているが、毛なみはふぞろいで、うすよごれていた。

前におかれたせともの小鉢のなかに、老人は自分のわりばしでおそばを切ってはうつしかえてやる。チビはしつぽをふりふり、ビチャビチャと舌をならす。あいまに、老人は、同じはしで自分の口にも流しこむ。

「きたないわ」

美沙はつぶやいて、かあさんを見る。かあさんが美沙の耳をきゅっとひっぱった。「だまっておいで」のあいずらしい。

最後に老人は、やきぶたをはしでちぎっては犬の口にはこびはじめた。一口与えて、つぎの一口は自分が食べている。

「かあさん、かあさんてば」

美沙はしきりにひじをつついたが、かあさんは知らん顔だ。

老人が、どんぶりから、スープをじかに犬にのませはじめたとき、美沙はもうたまらなくなつた。

「やめて！ やめてつてば。きたないじゃないの」

老人はてれたように頭に手をやって、

「これは、これは……わるいことをしてしまったね」

それから、おだやかなえがおをかあさんにむけてきいた。

「こちら、おじょうちゃん？」

「うちの人がちよいと具合わるくしちゃってね、この子が手伝わせてくれっていうもんだから……」

かあさんは、困ってしまったというように、

「女の子ってのはこまかくってね、ごめんなさいよ」

老人にあやまっている。

「なんの、なんの。こっちこそ甘えちゃってたんだから……」

ワン。

犬がうながすようにほえたので、老人は皮ひもをひっぱりながら帰っていった。

「ごちやごちやうるさくいわないでさ、少しは気をきかすもんだよ」

かあさんは、老人のどこかさびしそうなうしろ姿を見送りながら、美沙がわるいとばかりにやりこめる。だが、美沙にしてみれば、まちがったことをいったという気持ちはない。

「なにさ」

とほつぺたをふくらませた。

（かあさん、保健所へ届けるとき、衛生にはとくに注意します、っていったじゃないか）

あのうすよごれた犬が、じかにスープをのんだどんぶりで、このつぎは正輝くんがラーメンを食べることになるかもしれない。それがたまらない気がするのだ。

荻窪駅の建物のいちばん上、五角形の塔のてっぺんで、大時計が十一時半をさした。

「そろそろ、切りあげるかね」

かあさんはいって、よごれたどんぶりやはしをとりまとめはじめた。